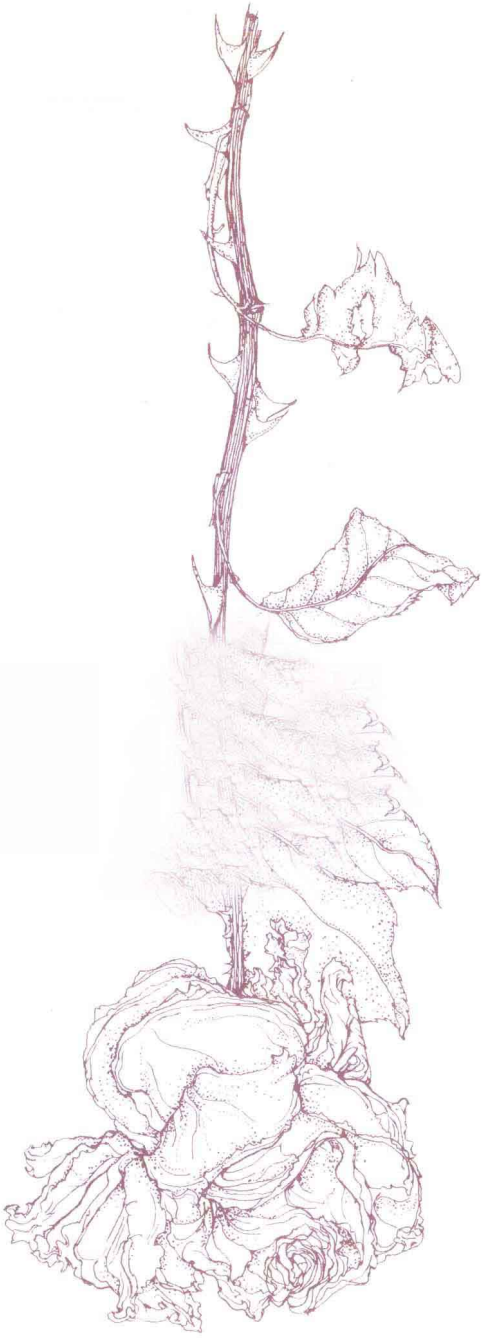
美少女・蟹

少女・蟹

河野多惠子



新潮社

美少女・蟹

一九六三年八月二一日　印刷
一九六三年八月二五日　發行

定價　三五〇圓

著者　河野多恵子
發行者　佐藤亮一
發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京（341）七一一一
振替東京八〇八番

印刷　塚田印刷株式會社
製本　神田加藤製本所

© 1963 by TAËKO KONO ; Printed in Japan
亂丁・落丁本はお取替へいたします。

愉悦の日々　五
春愁　六三
わかれ　八九
夜を往く　一三九
蟹　一六七
美少女　二一五

装帧·村上芳正

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

美少女蟹

愉悦の日々

その二組の夫婦が顔を合わせるのは珍しいことではなかつたが、その日は金井と泰子の結婚記念日だつた。

給仕女が去つてしまい、揃つてビールのコップを持ちあげると、

「おめでとうございます」

收と久仁子がそう述べた。

「ぼくらと違つて、やつぱり貫祿がありますね」

泡の引いたコップを置いて、收がつけ足した。

「銀婚式の祝辭みたいなこと言うなよ」

と金井は極まりわるそうな顔をした。が、更めて、

「こういうのも、いいもんだね」

そう言つて一同を見廻し、他愛のないところを見せた。

「わたしたちに感謝しなさい。思い出させてあげなければ、今年もまた忘れていらしたんじゃないの」

と久仁子が言つた。

彼等は二カ月ほど前に、結婚一周年を迎えたばかりだつた。當日、金井と泰子だけをアパートに招いて内輪で祝いをした。そのとき、從弟の收が言つたのである。

「泰子さん、結婚したのは、ぼくが高校のときでしたね。——だから、もう十年……にはならないかな」

「九年ね」

と泰子は答えて、收に言われた。

「すぐ言えるところがいいですね」

「そうでもないのよ。近頃じゃ、その日が來たつて、どちらも思い出さないくらいだわ。一昨日だつたのに、なんてあとで氣がついたりして」

金井が口を挾んだ。

「最初のうちは、どこかへ出かけたんだがね。いつの間にか……」そして、「ひとつ、今年はやろうじゃないか」

そう彼は言いだしたのであつた。

「これから、また毎年おやりになるといいわ」

と久仁子が言う。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

「そうするよ」
金井が答えた。
「で、ずつとわたしたちを招待して頂戴」
「いいとも」
「きつとね」
言いながら、久仁子はテーブル越しに金井のほうへ小指を差し向け、忽ち箸を置かせたりした。
暖い晩だつた。そこを出てから、皆で最寄りとは逆の新橋驛まで歩いて行つた。驛前でお茶を飲みに入つた。
「きみたちと一緒に出かけたのは、今夜がはじめてだね」
注文した物が來るのを待ちながら、金井が言つた。
「二度目じやないですか」と收が答えた。「ぼくらのアパートへ最初にご案内したときも、皆一緒だつたでしよう」
その傍で、久仁子がバッグを取りあげた。
「ちよつと失禮」
呟いて席を起つたが、テーブルから離れてゆきながら、せわしくハンカチを探つて口に當て、隅の扉を肩で押して消えて行つた。その後を、收が追つた。
「どうしたのかしら」

收が吸いかけのままにして往つた、たばこを起して揉み消しながら、泰子は言つた。
「――醉つてもいなかつたようだけれど」
と續けた。ところへ、お茶が運ばれてきた。少女はカップを配り、最後にミルク入れを手にしたが、片側の空席を見やると、
「置いてまいります」
とテーブルに載せて、去つた。泰子は、それを取りあげた。
「入れますか？――まさか、先刻のがわるかつたりなんか……」
金井は、ちらりとはずれの扉のほうへ眼をあげた。ミルクの注がれている手元のカップへ、また視線を戻して言つた。
「始まつているんじやないのかい」
泰子は、手を停めた。
「まあ、そうですか」
と彼女は言つた。

金井の豫想は間違つてはいなかつた。翌週の日曜日に訪ねてきた收たちは、最初からそれと判る表情であがつてきたのである。
先夜の禮も詫びもそこそこに、ふたりは、
「きみから言えよ」「あなた、言いなさいよ」と互に報告の役目の押しつけ合いをはじめるのだ

つた。揚句に、
「この間、病院へ行つてきました」
そう久仁子のほうが言い、揃つて顔をあかくした。
「それはおめでとう。——察しがいいでしよ」
と泰子は言つた。
「何、泰子の察しはわるいんだぜ。ぼくが言うまで氣がつかない」
と金井は發いた。
「いやね」
久仁子は金井に言つたが、
「それが、面白かつたのよ」
と今度は皆に聞かせる。
「——病院で、いろんなこと訊かれるの。はじめに、わたしの住所と名前と生年月日を言わされたんだけど、次に〈お父さんのお名前は?〉つて訊くじやないの。で、わたし、言つちやつたのよ、〈ありません〉つてね。だつて、本當ですもの。わたし、父の顔さえ覺えてないんですもの。だから大きな聲で〈ありません〉つて答えたのよ。そしたら看護婦さん、笑い出しちやつてね。〈いえ、あなたのお父さんじやありませんよ。赤ちやんのお父さんのお名前なんですよ〉つて言われちやつた」
久仁子はそこで、その話を幾度も聞かされた笑い方をしている收を顧みた。

「で、ちやんと言つてあげたわよ。細野收でございます、とね。どうお、満更でもないでしよ」
泰子は笑いの殘つたまま、訊ねた。
「どこの病院？」
收が、舊東京市内にある病院の名を擧げた。綜合病院なのだが、産科が名高く、それ専門みたいに思われがちな病院。——そして、泰子はまた、いつか友だちから、前に藥劑士勤めをしていたところとして、やはりその病院の名を聞いたことがあるのに氣がついた。
が、彼女は別段それには觸れずに、久仁子に訊いてみた。
「いつ頃になるの？」
「わたし、始終忘れているものだから、確かなこと判らなくて……。でも、二月の上旬——でなければ、一月のおしまいあたりらしいんです」
「そう。節分前後なのね」
と泰子は言つた。
「——寒い時分ね」
收がそれを受けた。
「ほんとに氣の利かないやつですね。でも、當分置いてくれますし、それに完全看護だから、わりあい樂だと思うんです。ぼくらはそういうところでないと困つちやう」
「それに、やつぱり立派な病院だと安心だものね。少々、高くついたつて」
と金井が言つた。

「ええ。――うちの係長の奥さんが去年あそこでやりましてね、逆兒だつたのに助かつたつて、係長がえらく感激して言つてたんですよ。それを、ぼくはちよつとここにね……」

收はそう言つて、得意そうに中指で頭の鉢を叩いてみせた。――泰子は眼を逸らさずにはいられなかつた。

三年ばかり前、泰子は都下に住んでいる知人を數年ぶりに訪ねて行つたことがある。改札を出て、この前通つたときとは見違えるように繁華になつた驛前の商店街を歩いて行つたが、たつた今、人の出てきた、これも眞新しい藥局の中に、鄕里の彦根の女學校で同級だつた人が坐つているのを發見した。白衣を着ていた。泰子は、昭代が東京の女子藥專に合格していたことを思いだした。

「ずつと東京ですか?」

泰子は、殆ど同時に崩れた相手の表情に迎えられ、そう言いながら店へ入つて行つた。昭代は頷き、立ちあがつて、

「卒業式以來じやなかつたかしら」

と言つた。そうだということが確められた。

「あがつていただく場所もなくて。――ね、あれをもつとこちらへ持つていらつしやらない」

昭代にそう言われて、泰子はたたきの隅から、丸い木の椅子をガラス・ケースの際へ寄せた。アンプル入りの强壯劑や、夥しい種類のガムや、コップに挿したひとつかみの耳掻きなどの犇く、ケース越しに向き合つて、ふたりは話しはじめた。

泰子は、結婚後こちらに住むようになつて六年近くなること、夫が通信電機會社に勤めていること、未だに子供がないことなどを話してしまうと、もう言うことがなかつた。

昭代のほうがまだしも話題は豐富であつた。同じ病院に勤めていた藥劑士と結婚したこと、昨年揃つて勤めをやめたこと、ふたりの退職金と家を賣つたお金を併せてその店を構えたこと、私室としては二階の一間しかないこと、裏のアパートに部屋を借りていて、夫の母とふたりの子供たちは大抵そちらにいること——昭代はそんなことを話した。

彼女はまた、かなりの期間、病院というような場所に勤めていたせいか、舊友たちの消息も蓄えていた。泰子は滅多にめぐり合つたことはないけれども、自分たちと同じように今では東京住いの友だちが幾人かあることも彼女は知つた。そうして、その中には、早くも物故した人さえあるのだつた。

「——あの方、たつた一年の結婚生活だつたのよ」と昭代は言つた。「最初のお産でなくなつたの。わたしが勤めていたときで……」

「あそこで助からないなんて、餘程の難産だつたの?」

と泰子は訊いた。

「切開を澁つちやつてね。いよいよ覺悟なさつたときには、もう體がもたなかつたつていうわ。初産だし、早くから入つていらして、毎日遊びに寄つていたんだけれど、實はわたし、そんなことにならなければいいがと氣になつていたのよ。ことによると、あの方、わるいときに當りそうだつたから。そしたら、その通りになつちやつて……」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo